



意識して多用したい4つの言葉

子どもとの良い関係（信頼関係）を築き、維持するための教師の言葉について、授業が始まってもタブレットから離れられない子に対する二人の教師の対応を例に考えます。

子ども A	教師 B	教師 C
	これからやることについて話をします。よく聞いてくださいね。	
(教師の話を聞いている。) ⇒	聞く態度、素晴らしいです。 やることは分かりましたか？	Aさんいいね。先生を見てしっかり聞いてたね。 ありがとう。やることは分かりましたか？ ①
それよりタブレットがいい。 ⇒	今はタブレットは使いません。机にしまします。	そうなんだね。でも、 ごめんね 。今はタブレットは使わないんだよ。分かってくれたら嬉しいな。②
嫌だ、絶対タブレットやる。 ⇒	自分勝手はいけません。ダメなものはダメです。Aさんだけ特別に認められません。	どうしても今、タブレットがやりたいんだね。でも 残念 。今の時間は使いません。30秒待ちます。③
(30秒過ぎてもタブレットに熱中) ⇒	いい加減にやめなさい。先生が預かりますか？	Aさん、先生は 残念 です。Aさんが自分で気持ちを切り替えられるのを待っていますよ。④
(しばらくして片付ける) ⇒	やっと片付けましたね。けじめはきちんとつけなさい。	Aさんいいね。自分で気持ちを切り替えることができたね。聞いてくれて ありがとう 。⑤

教師Bの対応は一般的で、大抵はこうしたやりとりで収まるものですが、時として子どもも教師もイライラを募らせ、怒りモードに陥りやすいというリスクも孕んでいます。

教師Cでは、ゴシックで表した言葉とそれに付随する言葉が加わっています。これらの言葉を差し込む心のゆとりとひと手間とが、双方の感情の高ぶりを抑え、子どもの譲歩を引き出しやすくするといった効果をもたらします。

①⑤の「いいね」と③④の「残念」は第5号で取り上げましたが、「残念」は、③のように子どもの残念がる気持ちを教師が代弁したり、子どもに「残念だけど切り替えよう」とのメッセージを送る意図で言ったりする場合もあれば、④のように教師が抱く残念な気持ちを伝える場合もあります。命令調は避け、教師自身の感情を伝えるのがベターです。

①⑤の「ありがとう」について、子どもは教師の言うことを聞いて当然と思うかも知れませんが、人間関係はすべて **give & take** で成り立っており、子どもが素直に聞いてくれるからこそ教師としての職務が成り立っているのです。「そんなことできて当たり前」であっても、子どものささやかな譲歩に対して、「ありがとう」のひと言を返したいものです。

②の「ごめんね」も、教師が子どもに謝ることに抵抗を感じるかも知れませんが、子どもの「今、これがしたい!」という純粋な欲求を遮るのですから、「**思いに沿ってやれなくて悪いね。でもここは聞いてもらうよ。**」との謙虚さと、譲れぬ意志を示す上で意味があります。

これらの言葉は、特別支援教育の対象児であるなしにかかわらず、どの学年にも、もちろん中学生に対しても日常的に多用したい言葉です。

★ 教師同士で上記の二通りの対話をしてみて、子ども役を演じたときに残る感情を、教師Bと教師Cの場合で比べてみると実感できます。



スッキリ?
モヤモヤ?

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392